

第8回平和市長会議総会 被爆体験証言

2013年8月3日(土) 14:45~15:45

広島国際会議場フェニックスホール

被爆体験証言者 松島圭次郎

司会：

それでは、ただ今から被爆体験証言を始めさせていただきます。

本日、被爆体験を語ってくださるのは松島圭次郎さんです。

松島さんは、広島工業専門学校の生徒であった16歳のときに、市内の千田町で被爆されました。戦後、中学校の英語教師を長年お勤めになった経験を生かし、英語での被爆体験証言活動にも取り組んでおられます。

今日は、英語で被爆体験を語っていただきます。

それでは、松島さん、どうぞよろしく願いいたします。

松島圭次郎：

市長、そしてご参会の皆様、私にとりまして、今日ここでお話をさせていただけること、大きな喜びであり光栄であります。これほど重要かつ影響力のある組織の総会が各国の参加者の皆様とともに開かれているこの場で、私自身の経験をお話しできることは大きな喜びであります。

広島すべての市民は、心から皆様を歓迎しております。本当に皆さんがこうして広島に来てくださることを感謝しています。私たちは強く信じています。私たちすべてにとって重要なのは、過去から学ぶことであると思っています。悲惨な経験であったけれども、過去から学ばなければならぬと思っています。

さて、少し私のことを紹介させてください。広島のことにも紹介したいと思います。

地図が見えるでしょうか。広島の地図です。デルタ都市でありまして、たくさんの川が流れています。今6本ですが、かつては7本の川が流れていました。周りには山々があります。低い山々があります。こちらは瀬戸内海です。こちらに港がございます、広島港。こちらは鉄道であります、主たる経路は、こちらを走って広島駅、そして北に向かって、2本、鉄道、こちらは、市電ですが、こちらとこちらの方に走っています。

これで、広島を紹介は完了ですが、米国の空軍が攻撃したのは本当に広島のだ真ん中でありました。原爆が爆発したのが、爆心地上空500メートルです。この丸で囲んだところは、爆心地から2キロメートルのところでありまして、完全に壊滅状態となりました。今日、近代都市として発展している広島を目にされたら、おそらく想像しにくいのではないのでしょうか。どれほどの廃墟と化したかということ、しかし本当に灰じんに帰したわけがあります。

私が生まれたのは、広島市の東のほうであります。ここに小さな山があつて、両親と、そして兄が3人いました。私は末っ子でありました。ここで育ったわけです。戦前、広島は中ぐらいの規模の静かな町でありました。人口は40万ぐらいだったのでしょうか。特に豊かでもない貧しいまちでしたが、幸せに暮らしていました。私はここで育ったんです。

私が小学校に行きましたときに、中国との戦争が始まりました。当時、私は子供でしたので、何も知らなかったんです、何も考えなかった。小学校を卒業いたしました。そして、中学校に入学しました。1941年です。その年の12月に、米国との、そして米国の同盟国との戦争がありました。それは、本当に悲惨な戦争となったわけであります。しかし、私たちは、当時、戦争が始まったということで、わくわくしておりました。真珠湾攻撃が成功したそうだとということで、成功したと聞いて男の子たちはわくわくしたものです。

戦争がずっと続きました。長い戦争となりました。41年、42年、43年、そして私、中学校時代はずっと戦争の時代でありました。兄が、2人、海軍兵となりました。しかし、間もなく日本が戦いに負けるようになってまいりました。戦況がどんどんと悪くなったんです。中学校時代というのは、ひどい中学校時代となりました。物資が不足していましたし、食べるものもどんどんと減っていきました。

戦争が終わる1年前、1944年のことです。夏のことだったのですが、太平洋地域の島々は既に米軍に占領され、そしてそちらで、島で飛行場が建設され、そして直接、日本本土への攻撃が、爆撃が始まりました。

その年、1944年、学生は、動員がかかりまして、工場で仕事をしました。もう勉強はせずに、学徒動員で、工場で仕事しました。本当に大変な日々でありました。

さて、1945年になりました。戦争最後の年となるわけですが、戦況は最悪であります。状況は最悪です。東京への大空襲が、3月10日、完全な攻撃、10万人を超える人たちが亡くなりました。大規模な空襲であります。こういった大規模な空襲が、大都市を中心に日本中で続きました。東京も、横浜も、名古屋も、大阪も、神戸も、岡山も、いずれも空襲を受けて、多くの市民が命を落としました。

しかし、奇妙なことだったわけですが、広島にはいっさい空襲がなかったんです。1回か2回、爆撃機がやってきたことはありましたが、とにかく広島は安全であったんです。

その年の春、家族にとっては悲しいことが起こりました。父が病気で亡くなったんです。母と私だけが広島に残っていました。そして、多くの都市で空襲がひどくなりましたので、母は、疎開しようということで、田舎の、大体北に40キロ行ったところに疎開することにしました。それは、母にとってはよかったと思います。母は、疎開していたので、生き残ることはできた。広島に残ったのは私だけになりました。

その春、ちょうど私は、中等学校を卒業し、広島工業専門学校に合格し入学しました。しかし、勉強は始まりません。学徒動員が続きました。工場勤務です。ただ、8月1日から先生方がこうおっしゃいました。もう一回学校に来なさい、短期の授業を開講するからとおっしゃいました。通常、私は勉強があまり好きではない怠け者なんですが、そのときは本当にうれしく思いました。また学校に行けると思ったからです。いいなと思ったんで

す。

さて、そういうことで8月1日から学校に戻りました。そして、6日後に広島に原爆が投下されました。それが当時の状況です。

その朝、私たち新入生は学校にいつものように向かいました。学校の場所は、この辺りです。南のほうになります。爆心地から2キロの場所にあります。当時、私たちは、駅の近くの寮で暮らしてはいて、毎朝、市電で学校まで通学していました。

私たちは本当に恵まれていたと思います。朝8時に授業が開始だったんです。既にもう学校に着いていました。8時にはみんな学校に集まっていたんです。そして、8時15分に爆弾が落とされたんです。仮に学校の授業開始時間が8時半だったら、9時だったらどうなっていたでしょうか。まだ学生たち、私はみんな市電に乗っていた時間です。そして、この爆心地の間近にいたことでしょうか。その場で焼けて、命を落としていたのだと思います。学校が8時に始まっていたということは本当に幸いでありました。

既に授業が始まっておりました。私のクラスは木造の2階建ての2階にありました。70人くらいの男子生徒が教室にいたと思います。私は、最前列、そして南側に座っていました。やはり私は非常にラッキーでありました。私の座っていた場所を考えてください。爆心地に近いほうかどうかということで、教室の中であっても、場所によって全然違ったんです、後ほど分かったことですが。この原爆が落とされた後、学校に戻りませんでしたので、ほかの生徒に何が起こったかよく知りません。その場で亡くなった方もいらっしゃるかもしれません。詳しいことは私も知らないんです。

しかし、最近、聞きました。ある男子学生が、北側に座っていたそうです、同じ教室の北側です。この人は、戦後も生き残ったのですが、非常に苦しい思いをされたそうです。やけどがひどかった、傷がひどかった、そして意識を失った。そして、後ほど助け出されたのですが、回復するまで何年もかかったと聞きました。北側に座っていた人、そして私は南側に座っていた、これによって大きな違いがあったということです、このようなことは後からみんな分かるのですが。

そして、授業が始まってから15分たったときのことで、私はたまたま窓の外を見ました。晴れたすてきな夏の日でした。空は青く、本当にきれいな日だと思いました。上を見上げたときに、アメリカのB-29が2機見えました。非常に高いところを飛んでいました。1万メートルぐらいのところかと思いました。3機、4機いるんだろうと思いましたけれども、見えたのは2機、既に1機は爆弾を落として飛び去るところだったのかもしれませんが。私は思いました、また来たのか。日本には、もう攻撃する戦闘機というのが残っておりません。従って、対空砲もなく、撃ったとしても、高いところまで届かないという状況でした。従って、アメリカの爆撃機は、いつでも飛んできたいときに飛んでくるような状況になっておまして、もう慣れてしまいました。2機だけか、何か通常の業務で飛

んでいるんだろうと私は思ったんです。きれいだなと思いました。朝の光を浴びて、機体が白銀に輝いており、きれいだと感じました。そして、次の瞬間、私が、もう一度、教科書に目を戻したときに爆発であります。本当に強い熱線と衝撃波が私を同時に襲いました。閃光と衝撃波と、そして熱線が同時にやってきました。私は、2キロ離れて、建物の中にいましたので、爆心地よりもずいぶん低かったはずですが、爆心地であれば4,000度を超えていたと聞いております。1,500度で私は溶けてしまうんです。それほど強い熱に1秒でも2秒でもさらされたら、何が起るか、想像できると思います。従って、爆心地に近い方はその瞬間に焼け死んでいたのだと思います。

銀行の入り口の階段のことをご存じかと思います。爆心地には、そこに座っていた、そこにいた方の影が階段に何年も残ったということ、それほど熱でありました。恐ろしいことです。私でも想像しがたいくらいです。

私たちは、2キロ離れていましたので、熱線はもっと弱かったのかもしれませんが、それでも本当に衝撃は大きいものでした。広島すべての市民は、自分たちが、爆心地からどれくらい離れていたのか、建物の中か外か、あるいは何かの影になっていたかどうかによって、そのときの運命が決まったのです。本当に恐ろしいことです。

その瞬間、私は、爆弾だと思いました。そして、耳と目を塞ぎまして、そして机の下に飛び込みました。そして、爆音が聞こえました。轟音です。何千もの雷が一度に鳴ったような轟音がしました。轟音の後、本当に静かになったんです。たくさんの生徒がそこにはいたのですが、だれも叫ばなかった、だれも声を上げなかった。そして、真っ暗になりました。暗闇です。真夜中のような真っ暗闇になりました。

私は、周りの床をはいずり回っていました。目が見えなくなった人のように、そして手から頭から血が出て、シャツもズボンも血まみれになっていました。地獄のようだ、私は死ぬんだというふうに思いました。お母さん、助けて、阿弥陀様、助けてということを何度も何度も思いました。

どれくらいの時間がたったのか、どれくらい床をはい回っていたのか分かりません。1分か2分だったのか分かりません。そして、だんだんと光が差ししてきました。天井は全部落ちていました。

しかし、幸いなことに、私の周りは床がしっかりしており、また、私の席は入口の近くにありました。何とか建物から、教室から出ることはできました。また、階段も壊れずに残っていました。校舎から出ることができたのです。

当時、みんなは、爆弾がすぐ近くに落ちたのだと思ったことでしょう。当時は、このような原子爆弾があるなどということは知らなかったので、すぐ自分の間近にひとつ爆弾が落ちたのだ、自分は何と不運なんだと思ったんです。通常弾が近くに落ちるほど、自分は運のない人間かと思ったんです。

しかし、校舎から出て本当に驚きました。学校の校舎全部が瓦れきになっていたからです。本当に多くの学生が、けがをしていました。そして、傷がひどく、骨折、出血、そして運動場に座り込んだり寝ていたりしました。私は混乱しました。なぜこれほどひどいやけどをみんな負っているのだろうか。さっき見たのは、爆撃機は2機だけだったのに、何が起こったんだろうと思いました。

そのときに、私は、自分は九死に一生を得ていてそれほど傷がひどくなかったということが分かりました。出血はかなりしていましたが、窓から飛んできたガラスによる小さな切り傷だけだったんです。骨折はなかったようで、歩くことはできました。私の傷は、それほど深刻ではなく、私は九死に一生を得たのです。

友人の一人が、助けを求めて、私のところに来ていました。頭に大きな傷がありました。友人を広島の赤十字病院まで連れていきました。赤十字病院、今でも同じ場所にあります。学校の200メートルぐらい北にあります。

彼を連れて、2人で校門を出ました。そうすると、また大きな衝撃を受けました。あちこちの家屋がすべて倒壊しているのです。瓦があちこちに崩れて落ちていました。大きな市電が走っている大通りが、学校の近くにあったのですが、市電はあちこちで止まっていました。そして、電柱は、傾いている、あるいは倒れてしまい、ワイヤが、ぶらぶら、ぶら下がっていました。市全体が燃えていたんです。火事があちこちで起こっていました。そして、町路は本当に煙でいぶされていました。もう訳が分かりませんでした。いったい何が起こったのか。

そして、何よりも煙です。何百人の人々が、長い列で町の中心からこっちに向かって歩いていらっしやるんです。彼らは、まさに爆心地で原爆に遭った人たちでした。彼らは、市からあちこちの方向に逃れ出ようとしていました。そして、この人たちに私たちは出会ったのです。

彼らは、もう本当に悲惨な状態でした。信じられないくらいでした。髪はもう小さい山のように頭の上に逆立っていました。髪が焼け焦げて、もうはげ頭になっている人もいました。本当に頭から足先までやけどがひどかったのです。皮膚は本当に墨のように黒くなり、顔から、首から、そして腕から皮膚が崩れ落ちそうになっていました。そして、衣類はもうぼろぼろになっていました。もう裸同然の人もいました。腰の辺りに焼け焦げたわずかな下着が残っているだけ、そしてもう豚のように膨れ上がった人もいました。皮膚が崩れ落ちて、そして顎だとか、あるいは腕から崩れ落ちていました。剥がれ落ちた傷、皮膚、そして真っ赤になった筋肉がむき出しになっていました。このような人たちが、もう例外なく腕をこういうふうの前にぶらぶら垂らして歩いていらっしやるんです。おそらく痛いために、このようにゆっくりと長い列をつくって歩いていました。まさに幽霊の行列のようでした。

けれども、その日、一日中、どこに行ってもこのような人の行列を見ました。もう数を数えることはできません。いったい何人の人がこれほどひどい重傷をあの一瞬で負ったのか、数も分かりませんでした。

私は、爆心地に行けませんでした。もう町全体が火災に覆われていたんです。無数の人たちが、もう歩けないという状態で、川辺に向かって四つんばいで這っていき、水が欲しいとおっしゃっていました。そして、川辺で亡くなっていたり、あるいは川で溺れて亡くなっていました。数日間、本当にこの川は、死体でいっぱい、そして潮の満ち引きに合わせて、浮いたり沈んだりしていました。町の通りは、もう死体だらけでした。町の中心部のほうには、私は全く立ち入れませんでした。とにかく、火災が広がっていたんです。

何とか病院まで行きました。しかし、病院の前庭には、傷ついた人たちがたくさんいてあふれかえっていました。お医者さんも、それから看護師さんたちも、負傷しており、助けることができない状況でした。私は、友人を再び学校に連れ帰らなくてはなりません。幸いにも友人は、御幸橋で軍の救援トラックに会って、そして港に行き、そこから島に搬送され、何とか一命を取りとめました。

原爆投下の直後の状況はそのようなものでした。本当に地獄でした。その一瞬で、何万人もの木造家屋が倒壊し、下敷きになって、あるいは焦げて亡くなりました。そして、多くの人たちが、その滅茶苦茶に壊れてしまった家を離れて、愛する人たちを捨てて、逃げなくてはならなかったのです。倒壊した家の下敷きになった赤ちゃんを捨てて、両親は離れなくてはならなかった、あるいは、ここはもう火事だからここに来るなと子供たちに言って、両親はその倒壊した家の下敷きになって亡くなっていったのです。このようなことが本当に起こったんです。本当に地獄でありました。

その後、私は救援に携わるべきだったと思います。しかし、当時は、まだ16歳の自分勝手な男の子でありました。ですから、できるだけ早くこの町を逃れねばというふうに思い、広島を出て、そして歩き始めたのです。この橋を渡りました。川の両岸が、まさに炎の中にありました。市全体が火災でした。大きな煙が市全体を覆っていました。広島が死んでいきよると思いました。アメリカがこのような巨大な破壊兵器を開発したということは、もうこの戦に勝つのは難しいかもしれないと思いました。しかし、私は、まだ若くて、そして降伏するなどということも考えませんでした。とにかく、このドームも崩れ、広島駅では火災が起きていました。市全体が煙の中にあり、市電も止まっていたので、1駅、2駅歩くことにしました。10キロ以上歩いたと思います。その途中でも多くのけが人の方々に会いました。

夕方になって、何とか救援の列車に乗ることができました。2、3駅乗って下車し、歩き続けました。もう真夜中近かったと思います。何とか母親のいる家に辿り着くことができました。そして、長い長い一日がようやく終わったんです。

でも、本当に私は幸運でした、生きて戻る家があったのですから。その一方で、原爆に遭った多くの方々はもうどこにも行けなかった。小学校だとかといったような郊外に避難するか、あるいは神社跡だとかお寺、あるいは市庁舎のほうに逃げなくてはならなかったのです。そして、こういった場所は、本当にその夜、負傷者であふれていました。水を下さい、水を下さい、と暗闇で頼む声が聞こえていたと思います。翌朝、多くの方々が亡くなりました。本当に悲しいことです。私は本当に幸運でした、帰る家があったのですから。

もちろん、母は私が帰ってくるのを見てとても喜び、「生きていたのね。」と言いました。田んぼで働いていたらキノコ雲が山の向こうに見えたそうです。そして、広島に大きな爆弾が落とされて、多くの方が死んだというふうに聞いたということでした。私のことも死んだと思ったそうです。ですから、私が帰ってきたのを見て本当に喜んでくれました。

でも、次の日から私は、かなり状態が悪くなりました。というのも、高熱と下痢です。あのときは、すぐに放射能でやられてしまうと思いました。ここにいたんです。2キロぐらい離れていたところですから、放射能はあつたに違いないというふうに思いました。でも、それからすぐに市を離れ、長い間はいなかったわけですから幸運でした。そのときは分かりませんでした。市を避難することができ、長期滞在しなかったということがラッキーだったのです。そして、1週間か10日ぐらいして回復することができました。その後、そして今まで、今日まで、時々病気になることはありましたが、まだ生きています。仏に感謝ということだと思います。

でも、今でも、おなかのところには病気を持っています。でも、薬を飲んでもうまく効かないんです。それで、ドクターに聞いてみましたが、なぜ薬は僕には効かないんだね、と。彼は、血液がおかしくなっているね、白血球の数が異常に少なくなっていますよと言いました。これは、通常よく起こっているんです。被爆者で生き残った人々の白血球は少なくなっているんです。だからこそ、薬を飲んでも効かないんです。それで、また医師に聞きました。これは爆弾のせいかな、というふうに聞いたんです。彼は、いろいろな分からないことがあるから、そのせいかどうかは分からないと言いました。

とても暑い時期でしたから、やけどや傷はすぐに化膿してウジがわき、人々はとても苦しみました。苦しんで、苦しんで、悲痛な声を上げて亡くなりました。

全然、けがもしていない、そしてやけどもしていない、一見、元気に見える人が、突然、病気になったりもしました。非常におかしな症状が起こりました。突然、高熱になったり、突然、けがで亡くなったり、それから血が止まらなかったり、下痢したり、体にいろいろな蕁麻疹のようなものができて、そして亡くなってしまったんです。そのときには、みんな知らなかったんです、放射能が何を起こすかということを知りませんでした。医者もまだ知らなかったんです。彼らは、これを被爆による影響というふうにだけ言っていました。一人、また一人と亡くなりました。1945年だけで、14万人ぐらいの人々が亡くなったので

はないでしょうか。

原爆投下から何年もたった後に、突然、病気で亡くなるという方もありました。ご存知のように、二、三年たって、白血球が減ったり、また白血病になったりして、そして生き残ったにもかかわらず亡くなった方がいらっしゃいました。私たち被爆者は生き残ったとしても、いろいろな苦しみに遭ってきたのです。知的障害の赤ちゃんや、身体的障害を持った赤ちゃんを産んだ人々がいました。原爆の子というふうに言われました。

そして、被爆者はいろいろな差別にも遭ってきたのです。一般の人々は、次世代がこのような被爆者の遺伝的な影響を受けるのではないかと恐れました。例えば結婚式なども、いろいろな影響を受けました。原爆の影響があるということで、結婚することができなかったのです。いろいろな噂が飛び交って、そして結婚することができなかった方もありました。被爆者は、本当に大変な目に遭ってきたわけです。

また、お聞き及びかもしれませんが、黒い雨の影響もありました。原爆が爆発したときに、灰がずっと上のほうに上っていきました。そして、原爆後、1時間か2時間たって、黒い雨となって私たちを襲ったのです。そして、その中には、黒い灰が入っていました。そして、この黒い雨が、特に西方面の郊外に広く降り続けました。1時間、2時間後のことでした。そして、黒い雨をかぶった人々がたくさんいたのです。私は、また幸運にも東方面に逃げましたので、黒い雨には襲われませんでした。でも、黒い雨をかぶった人々は、今でもいろいろな健康の問題を抱えています。これは、放射能の影響を受けているのではないかと疑われます。

ご存知のように、私は被爆者で、そして生き残った中でも幸運でした。いろいろ理由があったと思います。私は、まだこんなに生きていますし、私の家族の中で被爆したのは私だけでした。しかし、この市においては、たくさんの人々が、愛する人々、家族を亡くしたのです。例えば、友人の家族は6人亡くなりました。彼の家は、爆心地の東側にありました。当日朝、彼は工場で働いていたので助かったのです。でも、もちろんその日のうちに帰宅することはできませんでした。そして、二、三日たって家に帰りました。ここは、彼の家があったところです。彼はそこで両親や兄弟、それからおばあちゃんの骨、6人分を見つけました。すべての家族は亡くなったのです。彼は今でも原爆の話はしたくないと言っています。私は彼の気持ちがよく分かります。このような例が、枚挙にいとまがないわけです。今でも、この市にそういった人々が住んでいるのです。

本当にいろいろな形で、今でも原爆の後遺症を受けているのです。広島への原爆投下の3日後、長崎が原爆の砲火を受けました。そして、そのことを聞いたときに、新しい別の原爆だというふうに聞きました。何らかのダメージがあったというふうに聞いたのですが、大変なことであろうというふうに、予測にはかたくなかったのです。1週間後、日本は降伏し、そして戦争が終わりました。

そして、そのとき、あれは原爆だったんだということを初めて聞いたのです。私は技術者になるつもりで、工業専門学校に通っていました。でも、いろいろな事情で進路を変更しました。そして、学校の先生になりました。3年後、市に戻って、中学校での教員生活をスタートさせました。そして、この市で40年間教え、そして教員生活を終えました。まだ生きていますので、こういったことをさせていただいています。仏様が、生き残って経験したことをほかの人に伝えてあげなさいと言われてるように思います。私がお話ししたかったのはこのようなことです。

最後になりますが、ぜひ、原爆が、どんなに残酷で、そして悲惨な結末を出すということは知らなくてはなりません。そして、ここから教訓を知らなければなりません。原爆が教えてくれたことは何であったか、そして二度と同じ間違いしてはならないということを知らなければなりません。広島市の市民として、もっともっと世界の多くの人々に知っていただきたいのです。本当に原爆がもたらす現実的な悲惨さと、そしてこの原爆を二度と再び、世界のどこの場所でも、使ってはいけないということを胸に刻んでいただきたいのです。

もう既に皆さん、多くの努力をされて、平和活動されているというふうに知っています。ぜひ、すべての核兵器の廃絶を実現していただきたいと思います。そして、皆さんがこの広島で学習したことをぜひ他の人にも伝えてあげてください。そして、すべての世界での核兵器に反対することを皆様がお家に帰られたときに実行していただきたいと思います。世界が平和になること、そしてノー・モア・ヒロシマを念じて、私の言葉とさせていただきます。

ありがとうございました。

(拍手)

司会：

体験された方でしか分からないお話、本当に心にしみ渡るお話をありがとうございます。

ここで、質疑応答に入らせていただきたいと思います。会場の皆様で、松島さんにご質問がある方は、どうぞ挙手をお願いいたします。

実際に被爆という体験された松島さんでしかお答えになることができないきっと貴重な時間だと思います。

マイクをお持ちいたしますので、いましばらくお待ちくださいませ。

アーロン・トビッシュ（広島平和文化センター専門委員）：

原爆の後で火事が起こりましたね。火がつかました。そして、市の中心部から離れよう

と努めていらっしやったときに、後ろを振り向いたときにどうでしたか。この火柱が、そして煙が空の上に上がっていた、その光景をもう一度描写していただけますか。

松島圭次郎：

先ほども申しましたが、橋を渡って、川の両端を両方見ることができました。両側とも火事になっていました。それくらいしか見えなかったんです。ちょうど電車が通っている道を歩いていたのですが、市の真ん中の辺りを見ようと努めたんですが、何も見えませんでした。ただ、火柱だけでした。炎と煙だけでした。

ジャッキー・カバツソ（広島平和文化センター専門委員）：

松島さん、ジャッキー・カバツソです。

数年前ですが、私は、これは喜びというよりも名誉であります、アメリカのカリフォルニアのリバモア原子力研究所をあなたと一緒にツアーしました。本当に私たちにとってはつらいツアーだったと記憶しています。

この研究所は、現在も核兵器を開発し続けています。その研究所のスタッフがその日いろいろな話をしたと思うんですが、そのときの気持ちについてお聞かせください。どのように思われましたか。研究所の人はあなたにいろいろなことを語ったと思うのですが、どんなことをおっしゃっていましたか。

松島圭次郎：

広島市民の一人として、私は、本当にそれほど活発に平和活動していたとは言えないと思います。政治問題については、言及するのは難しいです。核兵器をいかに管理するかというのは本当に難しい問題だと思います。

ご存知のように、現在でも、国によっては、あるいは国の指導者によっては、核に依存しようという姿勢を持った人たちがいます。例えば、アメリカやロシアのような大国でも核抑止という戦略を使っているわけです。極めて政治的な問題で、何とも言及しにくいんです。しかし、幸運にもオバマ大統領は、核兵器の廃絶に対して肯定的な立場を持っています。ですから、米国が指導力を発揮してほしいと思っています。

以上です。

司会：

それでは、続いての方、マイクをお持ちいたしますので、しばらくお待ちくださいませ。

ヤスミンカ・バリヨ（バイオグラード・ナ・モル市参事官・クロアチア）：

こんにちは。素晴らしいお話をありがとうございました。クロアチアから参りました。質問ではありません。ぜひ私の印象を聞いていただきたいのです。

9月に原爆展をクロアチアの首都で開くことになっています。その原爆展ですが、首都で行った後、私の市、ビオグラード・ナ・モル市でも開催します。私は翻訳も通訳も行いますので、首都ザグレブで展示する原爆展のすべてのポスターを翻訳しました。その中でいろいろ学習しました。しかし、もっと大きな影響力、もっと大きな印象を与え、本当に心が震えるのは、被爆者の方々がいらっしやって実際のご体験を、今、松島さんがしてくださったように、話してくださる時なのです。マンチェスター市でも被爆者のお話をお聞きしましたが、どんな原爆展の資料よりも被爆者のお話が素晴らしいのです。以上です。

松島圭次郎：

どうもありがとうございます。

そのように言っていただきまして本当に嬉しく思います。

司会：

他にございませんでしょうか。

キダー・カリーム（ハラブジャ市長・イラク）：

ハラブジャ市長です。

聞きたいのは次の点です。長崎、広島を繰り返さないために、どのようなご提案をいただけるのでしょうか。私たちのハラブジャ市は化学兵器の攻撃を受けました。こういったことを繰り返さないということが必要です。本当にひどいことがクルド族に対しても起こりました。シリアでも起きようとしています。

松島さんのアドバイスをいただきたいと思います。核兵器の被害を繰り返さないために。

松島圭次郎：

私は政治家でも何でもありません。ですから、広島 of 市民の一人として私にできるのは、より多くの世界の人々に語り続けることです。核の持つひどい現実、そして世論がすべて結集して、核兵器反対の声を上げてくれるように語り続けることです。

もし世界の人々が強い核兵器反対の意見を持てるのであれば、その政府は核兵器を持ってはいけずだというふうに願っています。私ができるのはその程度でしょうか。政治家ではないです。いい提案というのもし出せません。非常に難しいです。

司会：

マイクをお持ちいたします。前列の方、お願いいたします。

小溝泰義（広島平和文化センター理事長）：

今日、私が申し上げたいのは、今まで核兵器が使われてこなかったのは、被爆者の方たちの努力、思い出したくもないつらい記憶を若い世代の人たちの伝えてくださった努力のおかげだと思います。

この被爆者の方々の思いを私たちは、決して忘れずに、命に刻み込んで、その上で、現実の政治にも、それから幅広い市民の大きな、大きな平和を願う渦を起こすために、私たち、また、もっと新しい世代の人たちが、真剣にその思いを現実的な平和への道に、実現していくということを固く誓わせていただきます。

今日は、そのわれわれの誓いをぜひ聞いていただきたいと思いましたので発言させていただきました。ありがとうございました。

松島圭次郎：

大変ありがとうございます。貴重なお言葉でございました。よろしくお願いいたします。

司会：

どうもありがとうございます。

松島圭次郎：

ご活躍をお祈りいたします。

司会：

ありがとうございます。

では、マイクをお持ちいたします。よろしくお願いいたします。

トーマス・マシュー（2020 ビジョンキャンペーナー・インド）：

インドから参りましたトーマス・マシューです。

7名の被爆者の皆さんをインドに迎えることができました、1990年以降です。

今のお話に本当に感銘を受けました。松島さんは先生だったというふうにおっしゃいました。今の新しい世代の核兵器あるいは核抑止に対しての考えや姿勢はどうお感じでしょうか。私は東京の大学と関わったことがあります。学生さんたちは、核の世界について話をしてもあまり関心がないようでした。インドやパキスタンにおいては、ご存知のように、より高度な兵器が開発されようとしています。私たちは心配しているんです。過去、広島

で起こったこと、これは世界全体に対しての教訓だというふうに言いますと、広島に行ったことがないという学生さんがたくさんいて、東京の学生さんも、あまり関心がない様子でした。

しかし、世界の他の諸国から見ると、今お伝えになったような広島のメッセージを聞くというのは、新しい若い人たちにとってとても重要だと思うんです。広島、そして長崎の体験を聞くということは。よって、若い人たちの姿勢をどうお考えになりますか。

松島圭次郎：

鋭い意見、ありがとうございます。

広島市内においても、若い世代というのは、残念ながら、一部ですが、余りこの問題に関心がない様子です。要するに、簡単に人間は物事を忘れがちだということです。恥ずかしいことです。

しかし、日本人での間でさえ、原爆のことを十分に記憶していない人たちがおり、そして少しずつ風化されようとしています。よって、広島市の市民としては、平和教育が小学校あるいは中学校で重要だというふうに思っています。そして、この平和教育に関しての特別なコース、課程がありまして、若い人たちに、原爆、そして核の恐ろしさを伝えようとしています。

ただ、確かに、あまりこの平和問題だとか核の問題に関心を持っていない人もいて、それは、残念なことですが、事実でもあります。もっと私たちは努力せねばなりません。

司会：

では、マイクをお持ちいたします。しばらくお待ちくださいませ。

そろそろお時間となりますので、最後のお一人とさせていただきます。申し訳ございません。

トーレ・ベツビー（フロン市長・ノルウェー）：

ご友人とともに赤十字病院に向かわれたということでした。けれども病院は機能してなくて、引き続きご自身で逃げられたということでした。現在、赤十字国際委員会が原爆投下による人道的影響について取り上げているのをご存知でしょうか。ご存知ないかもしれませんが、広島への原爆投下後、どのような救命・救援活動が行われたのか少しお話しいただくことはできますか。

松島圭次郎：

お知りになりたいのは、被爆者に対して、いろいろな救援活動が政府から行われたかど

うかでしょうか。原爆投下直後の救援活動についてでしょうか。

もちろん赤十字の運動にはとても関心を持っていますが、あまりこの分野のことを存じ上げないんです。申し訳ありません。

司会：

時間になってしまいましたので、ご質問等がおありの方もいらっしゃるようですが、誠に申し訳ございません、以上で質疑応答の時間を終了とさせていただきます。多くのご質問、そして松島さんへのメッセージ、誠にありがとうございます。

そして、松島さん、どうも貴重なお話をありがとうございました。今一度、皆様、どうぞ盛大な拍手をお送りくださいませ。

(拍手)

以上をもちまして、被爆体験証言を終了とさせていただきます。

続いてのプログラムは、原爆死没者慰霊碑参拝・献花、広島平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館および原爆ドームの視察となります。

初めに、役員都市の皆様からご移動していただきます。その他の総会参加者の皆様は、今しばらくお待ちいただきますよう、ご協力よろしく願いいたします。

平和記念資料館本館下に、献花用のお花をご用意しておりますので、会場を出られた後に、そこでお花を受け取って、広島市長を先頭に、役員都市の皆様、そしてその他の総会参加者の皆様の順に、原爆死没者慰霊碑への参拝・献花を行っていただきますよう、よろしく願いいたします。

その後、平和記念資料館にご案内いたします。資料館視察の後、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館と原爆ドームの視察は自由行動とさせていただきます。皆様にお渡しさせていただいておりますコングレスキットの中にパンフレットを入れさせていただいております。ぜひご参考にいただければと思います。

なお、皆様がこの会場を出られますと、入口を閉じさせていただきますので、どうぞお手回り品など、忘れ物のないようにお持ちください。

なお、ご休憩の場所として、地下2階のダリア1という部屋をご用意いたしておりますので、適宜ご利用くださいますようご案内申し上げます。

また、本日7時から開催いたします歓迎レセプション会場への送迎バスは、午後6時から随時出発いたします。お早目に平和記念資料館本館下にお集まりくださいますよう、ご協力よろしく願いいたします。加えて、各自、名札をお持ちくださいますよう、よろしく願いいたします。

それでは、役員都市の皆様から順に資料館本館へのご移動をお願いいたします。

なお、ご退席の際には、同時通訳レシーバーを受付にご返却くださいますよう、よろしくをお願いいたします。